**八幡堀**

八幡堀は、近江八幡の商業発展に大きな役割を果たした人工の水路である。全長約4.7kmの堀の中央部には、商人たちが建てた白壁の土蔵や伝統的な木造家屋が並んでいる。このため、堀の両岸は、旧市街の新町通り、永原町通りとともに近江八幡市重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。

八幡堀の歴史は、1585年、武将の豊臣秀次（1568-1595）が八幡山城を築城する際に堀を掘らせたのが始まりとされる。この水路は防御の目的もあったが、町と琵琶湖を結ぶ交通路として利用された。この運河と琵琶湖を経由して、京都、大阪、江戸などの大都市との物資のやりとりが行われ、町の発展と繁栄に大きく貢献した。八幡山城は1595年に廃城となったが、八幡堀を運河として利用し続けたことにより、近江八幡は交易の要衝としての地位を維持し、ここから全国に商人の影響力が広がっていった。

現役時代に八幡堀は定期的に浚渫され、清潔に保たれていたが、戦後に老朽化が進んだ。1960年代には排水が堀に流れ込み、ゴミが捨てられ、底にはヘドロが堆積して悪臭を放つようになった。1972年、近江八幡市は住民の声に応え、堀を埋め立てる計画を発表した。しかし、町の遺産が失われることを懸念した市民が堀の保存運動を起こし、「堀は埋めた瞬間から後悔が始まる」を合言葉に自主的な清掃活動を開始した。その結果、市の計画は中止され、水路はかつての美しい姿を取り戻した。現在も八幡堀は住民の手で整備され続けている。船を使った堀めぐりが観光客の間に人気となり、堀は時代劇映画やテレビドラマのロケ地としてもよく使われている。